

無想録 十四 感情

理論と感情、この二方面を持つのが人間である。正しい理論と、美しい感情、その一致したところに美しい生活がある。

理論の上の間違ひは、さほど大きな暗やみを造らないが、感情の間違ひでは、深刻な暗黒界を展開する。悲劇は、多く誤あやまられたる情の世界にくり返される。

論理では承認しても感情が承知せぬ。理論では分裂しないでも、感情では分裂する。理論闘争がいつのほどにか感情闘争となる。

情は熱いという。確かに熱い。

だが、情は熱いととも冷たい。時には氷よりも冷たい。

時に洋々たる大河のように大きく温かくゆたらかに流れては、大人格を成就するの感情である。

時に冷たく、鋭きこと髮かみそり剃のごとく、自らを殺し、他を殺すもまた感情である。

感情をぬきにしては一切の問題が考えられぬ。

感情を問題にしない人の事業は必ず失敗する。

「俺は嫌だ」修養のできていない人ほどの言葉が多い。少しも好き嫌いのないのは、愚鈍であるか、大聖であるかである。人間なるがゆえに好き嫌いがある。けれども、あまりに好ききらいの多いのは病気である。

悪む心はいけない心である。

しかし悪にくむべきことを悪み得ず、その深刻な憎悪の心と戦いぬくことのない人には、深い人生はあり得ない。そもそも本質的な道もまたあり得ない。

悲しみ泣くことは嫌いであるのだが、悲しむべきことを悲しみぬき、泣きぬかない人は恐るべき人である。一人の男の子の放蕩を苦にした父が、弟妹三人を道づれにして自殺した。四つの棺を送った男の子が、一週間たつかたない間に平気で笑っていたとしたら、その子の前途を恐れずにはいられない。

感激。感激のない者に生きた人生はない。

感激のない者に尊い仕事はない。献身的な実践はない。

熱しやすき者は冷めやすしという。だが、一つの感激が、一人の人を十年支配したらどうする。五十年を貫流したらどうする。しかしてわれらは、こうした人をあまりにも多く知っている。

書物を読む、感激がない。講演を聞く、感激がない。仕事をする、感激がない。家庭に帰る、感激がない。その時、そこにただ呼吸と食事をつづける屍体しかばねが動いてい

る。正しい感激が失われた時、とりとめもない暗いわびしい生存が続く。そこに意義がなく、力がなく、安らぎがなく、希望も光もない。女はヒステリーになり、男は自暴自棄になる。

今ごろのように社会的に、経済的に逼迫してくると、生きるのにはずいぶんと力がある。

行きつまった客観も問題である。だが、それを打ち開くのは、われらの生活力である。努力である。

火事も問題であるが、火事場で周章あわてすることはさらに問題である。

行きつまった境遇よりも、それを打開して生きぬこうとする強い情意のないことこそ問題である。

正しからざる情に流されることは、それ自体、迷いであり、流転である。行きつまりはこの迷妄の感情より生れる。

涙は、感情の象徴である。

法界を莊嚴するような美しい情も涙となつて光り、

地獄を出現するような惨憺たる情もまた涙によつて現される。

涙に徹することは、人生に徹することであり、われに徹することである。

女はよく泣く。そしてしばしば泣く。感情細かなるがゆえに、よく泣くのである。繊細デリケートなるこの涙の中に、真実の愛がただよう時、人生の隅々を生かす尊い力となる。もしこの細かなる涙の中に、毒素を含む時、一切を殺す恐しいものとなる。

万人を合して一つにするのも感情であり、

一を分裂して十にし百にするのも感情である。

人は人を褒めるとともに人を罵る。

罵りはするけれども、心の底には、それを好まぬ何者かがひそむ。

他人の悪口を言いたてて、運動する者の仕事広がっていかない原因がそこにある。

悪口や罵倒によつて、一人の味方を得た時、他に十人の人を失っている。

南無阿弥陀仏になりきつたのが聖人であった。その信には、正しくはつきりした、概念の骨格があつた。しかしその概念は、熱き直観と一致していた。宗教的理性と感

情が完全に一致していた。教行信証の正しき概念が信を指導し、熱き信の火が、概念の全体を生きた力にした。

正しき論理によって感情は指導さるべきである。迷妄なる情に流さるべきではない。われらが求道し、哲学するのは、感情以上の指導的地位を発見しようとするのである。

情は、毎日のお天気のように、晴曇変化に富む。しかもわれらの進むべき道は一本である。曇った日に旅をせねばならぬこともある。見えている理想すら棄てたい日がある。だが、晴雨にかかわらず進むべきである。

情に勝つことはわれに勝つことである。

笑うならば、天を貫くほど笑え。

泣くなら地軸に徹するほど泣け。

感情が人生の本質にふれるためには、冷たき眼が光っていねばならない。何ものにも動かされない信の立場が必要である。